王は再び聖剣を抜く

剣士雪

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アーサー王は現世に生まれ、普通の生活を送っていたが、勇者召喚に巻き込まれてしまう、その世界には聖剣に魂を封印されいるモルドレッドがいた。

目次

第1章　王国の闇
プロローグ ―― 1
死んだ眼の王子様 ―― 5
勇者達の実力① ―― 9
勇者達の実力② ―― 13

第1章　王国の闇

プロローグ

ーー召喚ーー

ーー気が付いたら、教室じゃなかった……

どういうことかと言うと、教室で私達は、掃除を終えて、帰宅の準備をしていました。あれは、一瞬のことだったのです、視界を奪われる程、眩し過ぎる光に世界を覆い尽くされた。視界が晴れると共に現れたのは髭が良く似合うおじさん、思ってしまった。これ、勇者召喚じゃない？っと。

ーーそう、気が付いたら、謁見の間だったの……

おもむろにおじさんが口を開きました。そして、とても長い説明が終わるとおじさんは仰りました。

「頼む、お主たちに世界を救って欲しいのじゃ」

一国の国王が頭を下げる程にこの世界は切羽詰まっていたのです。だから、私は心良く受けようと思った、でも違ったっとそんな事を考えていると、私たちのリーダーである生徒会長が言いました。

「国王陛下、頭をお上げください」
「きっと、私達が世界を救って見せます」
　私は思ってしまった本当に切羽詰まっているのかと、なぜって思う人がいるかもしれない。先程の思考の続きをしよう。召喚された殆どの者が国王の傍に居る姫の魔眼の虜になっていた。この様な下衆な戦法使う様な国なのだ。
　ーーそう、この国は信用に値しない……
　だが、皆が生き残る為にも私も虜にされている振りをしなければならない。私と言えども人質を取られてしまったら思う様に動けなくなってしまう、だからあくまで自然に振る舞うのだ。そう、思考している内にかなり話が進んでいるらしく、どうやら魔力量など勇者の適正があるかなどをこれから調べるらしい。
「うむ、とりあえず名前を呼んだら前に出て来ておくれ」
「かしこまりました、国王陛下」
「では、本田拓也殿から始める」
　拓也は水晶に手を触れると眩しく輝き出すと、水晶の色は緑→黄→赤→白へと至ると、回りから歓声が鳴り響くどうやら話を聞いたところによると白が一番凄いみたい。
　あっ拓也って誰？って話、拓也とは生徒会長の事です。
　どんな人か？ですか。拓也は黒目黒髪で文武両道で優しく、優雅で誰にでも愛想を振

りまくモテモテのイケメンですよ。あら、皆様に説明している内に私の番が来た様です。
「桜・フォン・エインズワース殿」
　私が水晶に触れると何も起こらなかったのです。
「魔力がない者もいるのだな姫よ」
「恐らく、父上彼女の回りの者が些か優秀過ぎたのでしょう」
　水晶が光らないと魔力が無いとうことらしいです。無いと分かったら直ぐに姫の態度が変わり始めました、あれは正に人を蔑む目でしたが国王に何かを言われた途端眼の色が変わりました。
「拓也殿に桜殿それに翔殿達には勇者の適正がある様じゃな」
「それでは、勇者様方は別の場所にご案内します。」
「付いて来てください。」
　どうやら、ここから別行動になるらしい、それにしても、姫の反応が面白い、媚びる様な眼差し勇者と分かった途端にこれです。
「ここです」
　案内された場所は庭園でした、色とりどりのお花が植えられた美しい場所でした真ん中に大きな石があり、そこには、剣が三本刺さっていました。

「ここはかつての勇者が置いていたと言われる聖剣が三本刺さっています。」
「これらを勇者様方に抜いて頂きます。」
　聖剣を抜くだけという事だけで少し拍子抜けでした生前もやっているとても簡単な事、選定の儀って事ですね。姫が言うにはどれかしらが、抜けるらしいです。それにしても聖剣にはどれかしらの世界から降霊させた英雄の魂が宿っているらしいです、とっても楽しみですね。拓也と翔が順に抜き最後に私が聖剣を抜くと英雄の記憶が頭に流れ込んで来た。
　ーー嘘、この聖剣は……いえ、彼女はモルドレッド……
　ーー時を超えて相容れぬ親子は今、繋がろうとしている……ーー

死んだ眼の王子様

ーー真実ーー

聖剣を抜いた後、私達はお食事会に案内されました。そこで、私は彼と出会いました。

「ご紹介しますね、皆様」

「こちらは皆様方達と共に旅する第一王子の」

「フィアナだ、これからよろしく頼む」

フィアナ王子の第一印象は死んだ魚の様な眼をしている事と丁寧で紳士的な人であることでした。案内された自室にて、王子に付いて考えていた、何故なら彼から血の匂いがしたからです。思考を巡らせているうちにお食事会が始まる時間帯が迫っていました。急いでお食事場所に向かいます。

「勇者の誕生を祝って乾杯〜♪」

姫の掛け声と共にお食事会が始まりました。そして、食事も無事終わり、自室に戻ると何故か、王子が居ました。

「何故、フィアナ殿下がいらしゃるのですか?」

「そう、堅苦しい呼び方は辞めてくれ」

「俺の事はフィアナでいい」
「かしこまりました、フィアナで宜しいですか？」
「堅苦しい喋り方も辞めてくれ」
「分かったわ、フィアナ」
　ここで辞めなかったらずっと続きそうだったのでとりあえず堅苦しい喋り方を辞めました。
「ところでフィアナ何故、ここに」
「桜に話がある」
「召喚された者達は皆、性格がバラバラだ」
「皆を繋げているのが君だろう」
「そんな君に話事がある」
　何でしょう？フィアナはおもむろに話出したので王国の闇を……
「つまり、纏めるとフィアナは王国の闇を粛清する暗殺者で姫が王国を牛耳っている為、傀儡政権であると」
「そのとうりだ」
「呑み込みが早いなやはり君は魔眼にかかって無いのか」
「魔眼ですか？」

知らない振りをしてみるとフィアナが少し顔しかめた
「リリー姫は気付いていないみたいだが」
「君、かなり魔力があるだろう」
「魔力量が多く無ければリリー姫の魔眼は無効か出来ない」
「リリーの魔眼には欠点があってだな自身より魔力量が多い者には通じないんだ」
「そうなんですか」
そんな、まるで魔力が視えているみたいな言い方。
「俺は生まれ付き魔力が眼に視えてだな」
真面目に視えているの、フィアナとは敵対したく無いですね。
「それに、君の魔力と聖剣が纏っている魔力の波長がとてもあっているな」
「これなら、確実に魔王を倒せるかもしれないな」
「どういうことなの？」
「魔力の波長が合えば合う程、聖剣の最大限に発揮出来る」
やっぱりそうなのですね。波長はかなりあってるだろうね、娘だし。
「魔王を倒した後何だが恐らく姫は君達を虐殺するだろう」
「だから、勇者の訓練期間の内にリリーを追放して、王国の闇を消し去りたい協力してくれないだろうか？」

「良いですよ、フィアナ」
当然、あの子、第一印象から嫌いだったし徹底的にやるわ。
「では、また、後日伺う」
そう言うと王子は去っていた。さあ、邪魔が入らない内にモルドレッドととの対話を始めようか。
「コンコン」
今度は誰よ

勇者達の実力①

ーー訓練ーー

「起きているか？」

この声は翔ね、皆お姫様に夢中みたいだし、来るのは翔ぐらいか。翔も元英雄らしいけど詳細は知らないのごめんね。

「起きているわ、入ってきて」

「じゃあ、入るぞ」

「フィアナから、話を聞いたか？」

「ええ、聞いたわ」

「フィアナが真っ直ぐに私の所に向かうはず無いもの、貴方がけしかけたのね」

「その通りだ、フィアナは魔眼持ちじゃ無い、ただ人より勘が鋭いだけだ」

「お前なら、魔力の話を持ち出せば必ず協力してくれるだろ？」

「その通りよ、本当に人が悪いわね」

「で、これからどこを調べる？」

「使い魔を放ち、とりあえず書庫で調べ物かしら？」

私としては、書庫が一番気になる所、やはり敵国を調べるには書庫が一番よね、王としては見過ごせませんわ。
「そうだな、書庫から調べよう、結構は夜中いいよな」
「構いませんわ」
実は翔とは多少険悪な関係です。私も仲良くしたいと思いますが、話している内にいつも、喧嘩腰になってしまいます。翔が帰った行ったので聖剣に付いて調べることにしました。
「やはり、意識を封じられているみたいですね」
「対話は無理」
「解析はマーリンにでも、頼みましょうか」
――君はやっぱり人使いが荒いね……
「また、覗きですか？趣味が悪いですよ」
マーリンは本当に趣味が悪いです、最近は魔法少女者にハマっているらしく、いつ、聖剣に変身機能が追加されないかヒヤヒヤしています。
――何で分かったんだい？
「本当に追加したのですか、お願いだから辞めて下さい」
――別にいいじゃないか、で、聖剣を解析すれば良いのかい？

「はい、お願いします」
ーー解析する変わりに聖剣の機能はそのままで良いよね？
「はぁ、分かりました」
マーリンは心まで読めてしまうから、一番厄介な相手だ。
ーーじゃあ、またね～
そろそろ訓練の時間みたいね、訓練場に急がないと行けません。それはそうと勇者に選ばれた人とそうで無い人は訓練が別々らしいです。
「どうやら、集まったみたいだな」
「教官のフォードだ、よろしく頼む」
「では、訓練を開始したい所だが」
「まずは、自身の好きな武器を選んでくれ」
拓也は双剣、翔は拳と両手剣、私は片手剣と盾に弓を選んだ。
「それでは、最初にお前達の現状をみたい」
「俺に選んだ武器で挑んでこい」
最初に拓也が挑みかかったが直ぐにあしらわれてしまう。
拓也は直ぐに、体制を立て直し次の攻撃に入るが、また、あしらわれてしまう、それが１０分ぐらい続き遂に拓也は膝を付いてしまう。

「クソ、何で当たらない」
「お前の攻撃は馬鹿正直過ぎる、フェイントを入れろ」
次は翔が拳で挑んだ教官を圧倒し、調子に乗っちゃてる、恐らく足元をすくわれるだろうね。
「お前は調子に乗る悪い癖がある様だな」
「みっちり叩き直そう」
やばい、翔、絶対死んだフォード教官は超怖い噂があるから怒らせたらやばいらしいです。私の番が来ました。
「では、君の力量を見ようか」

勇者達の実力②

ーー剣戟ーー

「昨日、拓也から聞いたぞ、異世界では剣を嗜んで居たそうだな」
「あくまで腕を見るだけだったのだが」
「気が変わったよ正式なルールに則ってやろう」
「では、始めよう」
二人は定位置に着てから
「よろしくお願いします。」
お辞儀をする。
私達は最初、睨み続けどちらかが動くのかを待ち続けたいたが教官が先に痺れを切らし踏み込んだ。私はそれを待って居たのだ、盾で受け流し、剣で教官を突くフォードはそれを後ろに飛び跳ね躱す。また、睨み合いが続いた、先に私が動き右斜め上から斬りつけるが、フォードがそれを受け流し、その様な剣戟状態がずっと続いた。
「少し侮っていた、済まない」
「そろそろ、本気だそう、ついてこれるか?」

「当然です」
　フォードは剣を一旦鞘に収めましたね、何かをする気でしょうか？
　一方訓練場の片隅では二人の男性が勇者の力量を見ていた。
「溜めてるなあいつ、アレを使う気だね」
「アレってあれっスか⁉？」
「フォードさん、女子相手本気出す気っスか？」
「死んじゃいますよ止めなくて良いんっスか？」
「大丈夫でしょうね」
「フォードが本気を出すという事は彼女はフォードと同格の手練れかそれ以上じゃない」
　視点は戻り
　ーー五月雨斬り
「小賢しい防御は出来なくなったな」
　たかが盾を破ったぐらいじゃ私は倒せないよ。私は背中の鞘に収めていた剣を左手で抜き放つ。
「君はやはり、二刀流だったのか」
「来い」

私は一度距離を取り剣を構えた後距離を一気に詰めて放つ、その速度音速を超えているだから私が瞬間移動をした様に見える。

ーー　不可避十字斬り

不可避と銘打ったが、音速を超える反応速度があれば躱す事は可能です。

「なっ」

無論刃丸めてあるため骨が折れるぐらいで済ます、死にはしません。そのまま、フォードは訓練場の壁にめり込んだ。

「見事だ、桜よ」

「私が負けるなんて始めてだ」

「剣聖の名を君に譲ろう」

「えっ、教官、剣聖の称号持ってたのですか?」

「これでも昔は凄かったんだぞ」

少し教官は不機嫌そうに言う。

「それに今でも、魔王軍四天王とは競い合えるぐらい技量はあるつもりだったが」

「流石剣聖、凄いですね」

「本当に驚いたよ、異世界に俺より強いやつが居たんだからな」

「君なら魔王を倒せるかも知れない」

「頑張れよ」
「それにしても身体が痛てえなぁ～」
「大丈夫ですか？」
　私はそっと手を差し伸べる、その手をフォードが掴みゆっくりと起き上がる。そのタイミングを待っていたかの様に二人の男性が近づき私達に話かける。
「見事だ、勇者達」
「まぁ、拓也殿に関しては最初から剣術を教える必要がある様だが」
「それにしても、凄いっスよ、フォードさんに勝つなんて」
「えっと……」
「そいつは、格闘家のディック」
「元勇者パーティーの一人っス」
「で、その隣に居るのは宮廷魔法師のシャルルだ」
「よろしく頼む」
「えっ、魔法師だったんですか？」
「はぁ、お前ら絶対私の事騎士だと思っただろ」
「よく、言われるよ」
　間違えるのも無理はない宮廷魔法師にしてはやけに筋肉あるし、誰もが彼女が魔法師

だなんて分からない。
「勇者達、疲れただろう、良い店紹介するよ」
「お店行く前にフォードさん回復しないと」
「それもそうだな」